

弘濟寺 かわら版

第101号

令和5年3月17日発行

弘濟寺 玉野千永 編集

弘西寺 131 0465-74-1717

弘濟密寺

検索

お地蔵さん修復日記 最終回・・・



お地蔵さまに宝珠をのせる 三乗堂 中さん

弘濟寺では令和3年よりお地蔵さんの修理を進めてまいりました。今年の1月に台座・光背の修理も完了し本堂左の部屋に安置されました。約2年という歳月をかけて三乗堂さんにより修理をして頂いた様子は、弘濟寺ホームページの「お地蔵さん修復記」より詳細をご覧いただけます。写真も多く、大変わかりやすい記事となっておりますので、どうぞ覗いてみてください。

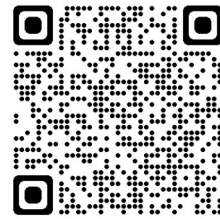
仏像の修理をするにあたり、まずホコリを払うわけですが、担当の中さんは、「ホコリは沢山の人達に守られてきた証であるから、その証であるホコリは全て依頼者にお返しする」と新聞の連載に書いていらっしゃいました。(下野新聞 しもつけ随想「ホコリも文化財」より)

私たちも32年という長い年月の間に積もった大切な大量のホコリ(笑)を受け取りました。先人達により守られてきたホコリから、新しく積まれていくホコリへとつなぎ、未来へとバトンを受け渡せたようなそんな気持ちになりました。三乗堂さんに修理をお任せして、本当に良かったと思います。そしてお地蔵さんの修理にご協力頂きました、すべての皆さまに感謝申し上げます。ありがとうございました。そしてこの想いをみなさんと一緒に未来へと繋げていきたいと思えます。



地蔵菩薩坐像胎内には修理銘札と巻物に書かれた令和寄附者芳名帖(下)が納められました

お地蔵さんが本堂に安置されたのと同時に、お正月三が日のみ御開帳していた位牌堂の「お大師さん」を右の間に移動し、お参りしやすいくつでも拜めるようになりました。お不動さん、お地蔵さんと併せてお参りください。



弘濟寺ホームページ <http://kosaimitsuji.jimdo.com/>

雑誌に掲載されました



Discover Japan 3月号(60~65ページ)にお地蔵さんと住職が掲載されました。バックナンバーですが、WEBでポチっと購入可です



お地蔵さまの今後の予定

- ★ 木造地蔵菩薩坐像 一般公開
日程…6月8日(木)・9日(金)・10日(土)
時間…10時から16時まで
場所…弘濟寺
拝観料…無料
- ★ 地蔵まつり 開眼供養大般若転読法要
日程…7月23日(日)
- ※ 次号に詳細掲載いたします
- ★ 神奈川県立歴史博物館へ
※ 秋の特別展に出展予定です。
※ 詳細が決まりましたらお知らせいたします

智慧の風が吹き抜けるお寺に その2

～^{そら}宙を舞う經典 ^{はんじゃ ほんぼう}般若の梵風そよぐ～



玄奘三蔵拓本(弘濟寺蔵)

前回のかわら版で大般若経の木版印刷について書きました。今回はお経をインドより中国に持ち帰った玄奘三蔵のお話をつづりたいと思います。

三蔵法師といえば西遊記を思い出しますよね。でも三蔵法師という名前は、「経」…お釈迦様からの教え、「律」…守るべき戒律、「論」…お釈迦様の教えの解釈、という三つの蔵の解釈をすべてマスターした人に与えられる称号なんですって。なので三蔵法師と呼ばれる人はたくさんいるけれど、いちばん有名なのが玄奘三蔵なのです。夏目雅子や宮沢りえ、ドラゴンボールではブルマ（若者に人気の漫画なので是非身近な若い子も呼んで「三蔵法師といえば？」と話題にしてみてもね♡）と、演じた人はみんな美人で有名ですが、実は屈強なイケメン男子であり、実在するお坊様なのです。彼は13歳で出家して長安のお寺で仏教を学びますが、先生によって教えの内容が違っているので迷ってしまいます。そこで本場インドへ行って、きちんと仏教を学びたいと考えました。でもその頃、中国では国外への旅行は禁止されていたのです。それでもどうしても学びたかった玄奘三蔵は28歳のとき、国禁を破って天竺と呼ばれていた北インドへ仏教を学びに旅立ちます。その頃の旅は勿論飛行機、車などありません。その距離約3万キロ（地球



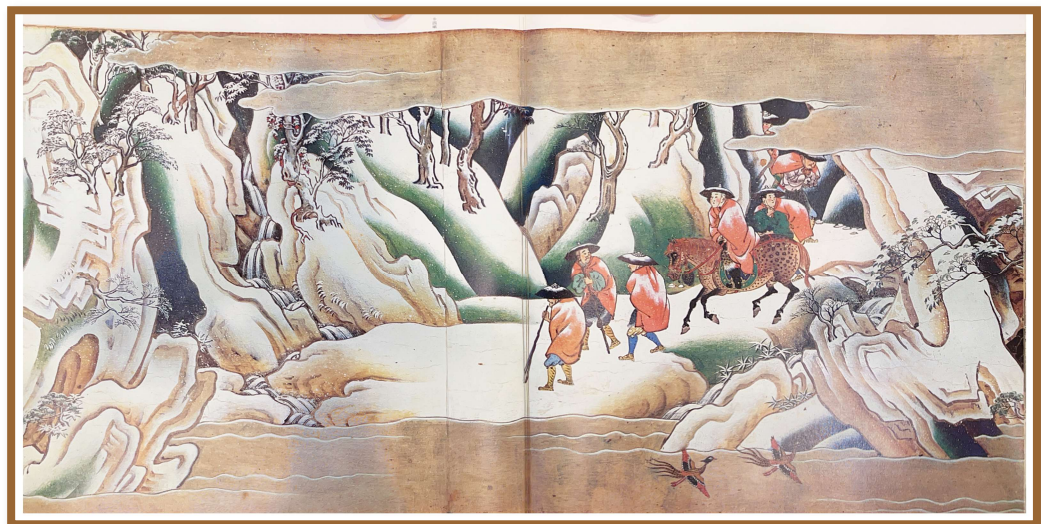
三蔵法師と言えば
夏目雅子さん
年齢ばれる!! (笑)

1周で約4万キロですよ!!) ゴビ砂漠や雪山、ガンダーラも歩いたり、馬に乗ったりして通りました（ゴダイゴの歌声が聞こえてきますね♪）実際はのんきに歌等歌ってられない大変過酷な旅で、人も馬も多数が息絶えてしまったそうです。そして、やっとたどり着いた天竺の仏教大学ナーランダ僧院にて5年学び、沢山の經典を持ち帰るため、帰りは馬22頭に積んでインドを後にしました。17年間お釈迦様の仏跡を訪ねながら、仏教を学ぶ旅を終え中国に戻ると国を上げて歓迎され、今度は經典をサンスクリット語から中国語へ翻訳する作業に入りました。その時にお馴染みの「般若心経」を始め「大般若経」等、膨大な数の經典が漢文に翻訳されたのです。玄奘三蔵は40歳を超えていました。64歳で亡くなるまで、ハイスピードで翻訳したと言われています。なぜそんなに急いで訳して、またなぜ身の危険を犯してまでインドへ經典を取りに行ったのでしょうか？それはお釈迦様の經典には「すべての人がどうしたら幸せな今を生きられるのか」という教えが書かれていたからなのです。その後、翻訳された幸せの經典は同じ漢字の国 日本に伝わりました。（あれも）これも三蔵法師のおかげですね。

「おっしょさんありがとう。」 by 悟空風千枝

「大般若経」は、玄奘三蔵の肉体的な強さとかじけない精神力によってもたらされた大変貴重なお経のひとつなのです。そして、過酷な旅の様子は「大唐西域記」という旅行記として書き残されました。それを元に書かれた冒険物語が私たちの知っている「西遊記」なのです。

今回はそんな貴重な経本を読むことで、智慧の風が吹き抜ける!!といわれる「大般若転読法要って何？」のお話です。



天竺（インド）のナーランダ僧院（大学）を目指し砂漠を超え、雪山（ヒマラヤの山々）を超え、三蔵法師一行は進んでいきます
(国宝「玄奘三蔵絵」藤田美術館蔵より)

寺カル～

● ヨーガ教室 ●

講師：Lomdii ともぞ～先生
 日程：毎週水曜日 10時から
 場所：弘濟寺本堂にて
 参加費：1回1,000円

● タピボン教室 ●

講師：タピボン手芸研究所
 山岸万里子先生
 日程：毎週第2水曜日 14時から
 4月12日
 5月10日
 6月14日
 場所：弘濟寺客殿にて
 参加費：1回1,000円
 ※ 初めての方は事前にお申込みください

皆様のご参加お待ちしております



ご縁があり知人よりピアノを譲り受け、客殿に設置しました。最近流行りの「駅ピアノ」ならぬ「寺ピアノ」です。ご法事の待ち合いや、お齋の際に弾いてみてはいかがでしょうか？先日のある法事ではお孫さんが、亡きお祖父様のために生前お好きだった曲♪ふるさとは今もかわらず～(新沼謙治)を演奏され、「とても良いご供養ができた」と、ご親戚の皆さん大変喜んでおられました。

本の紹介

「いいお湯でした。」

作画 冬川智子



令和4年に発行した「弘濟寺と一つ目小僧」の挿絵を描いてくれた漫画家の冬川智子さんが

今話題の大ヒット上映中映画「湯

道」のスピノフコミックを

出版されました。橋

本環奈さん演じる

ヒロイン・

いづみが銭

湯に、はま

って行く

前日譚で、実

在の銭湯も素

敵に描かれ、読

後は花冷えし

た身体をほっこ

りと温めに行き

たくなっちゃ

うこと間違い

なしですよ。お

湯に感謝して、潤し

水を口に含み、風呂敷持

って銭湯行きたいなあ～。



お釈迦様ゆかりの縁日三仏会

仏教には、「三仏会(さんぶつえ)」というお釈迦さまにゆかりのある大切なご縁日があります。

① 4月8日のお釈迦様の誕生日は「花まつり」「仏生会」(さんぶつえ)ともいいます。弘濟寺では毎年花御堂を花で飾り付け、誕生仏に甘茶をかけておまつりしています。甘茶の接待有り。

② 12月8日は、悟りを開いた日を記念する「成道会」。朝のお勤めの際に法要。

③ 2月15日はお釈迦様の亡くなられた日で「涅槃会」。涅槃図を本堂にかけてお釈迦様の生涯をお話します。毎年14時より涅槃会を行い、絵解きの後お供物の涅槃チョコの授与があります。

この三大法要は宗派を問わず全国の寺院にてお釈迦様の遺徳を偲ぶ法会として営まれています。

先日、弘濟寺涅槃会法要にお参りしてくれた方から嬉しい投稿を頂きましたので次ページに掲載させていただきます。

レストラン マジェール

★ 法事用特別コース
4,000円
4名様より(個室完備)

☎ 82-0335

開成町宮台 63(シャトレーゼ向い)



有限会社 勝又

南足柄市飯沢 12-10

☎ (0465) 74-2306

ご贈答品のご用命は

足柄ハリカ

南足柄市飯沢 51-4 火曜定休日

TEL (0465) 74-5221

絵解きに伺って

柳沢 正臣

お寺のヨガに行くと、本堂に大きな涅槃図が掛かっている。今日はお釈迦様が入滅された日。ご住職の真永さんが、午後2時からうちの千枝が絵解きをしますので、ご都合がつけばどうぞと仰る。

絵解きは、仏の教えに基づく絵に描かれたものを説明しながら人々を啓蒙するもので、多数の参詣人に行うような場合は半ば芸能のようになることもある。学生の頃に東京国立博物館に行くとそのような仏画がいくつも展示されていたのを覚えている。

博物館には涅槃図の外に、来迎図、地獄絵図などもあった。伊藤若冲の果蔬涅槃図という興味深いものも見た（大根をお釈迦様に見立て、周りを取りどりの野菜や果物で取り囲むという意表をつくもの。さすが青物問屋の出の若冲らしい作品）。



絵解きと

聞いて若いときのそのようなことを思い出し、一瞬軽んずる気持ちがあるが、考え直した。待て待て、聞いて見なくてはいけません。

暗闇の中で

それで午後再びお寺さんに行った。本堂を暗くして右側の掛け軸に光が当たるようになっていた。いくつかのストロブの回りに年配の女性たちが10人ほど集まっていた。お線香を点して皆さんの中に入る。

濃い紫のお召し物を着た大黒の千枝さんが、まずお釈迦様の生涯を手短かに話され、そのあと涅槃図を使いお釈迦様の最期の様子を語る。横に真永さんがいて、描かれているお釈迦様、回りを取り囲む御弟子たち、天から下る摩耶夫人、様々な動物などを長い棒で指し示す。

千枝さんのお話を聞いていると、お釈迦様の最期の様子が見えてくる。

お釈迦様がいなくなったら何を頼りにしたらよいのかと嘆く弟子に対し、お釈迦様はこれまでに説いた普通の理である法と行動の律に従えばよいのであると説かれた。お釈迦様の「アーナンダよ・・・」と諭す言葉が聞こえてくる。それは中村元先生によるブツダの生涯のお話を思い出させるものであった。

母のこと 父のこと

さらには、曾ての母との対話も思い出した。母と話をしている、自分が母という個人を超えた明晰で普遍的なある精神と対話をしているような気持ちに捉われたことがあった。

できるだけ長く母とこのような会話を続けたいと願うものの、仮にそれが叶わなくなったとしても、母なら何と云うであろうかと自らに問うことで、その声を聞くことができるような、ある何かはこちらに手渡されたように感じたことを思い出した。もう

17年前のことになる。

またお釈迦様に最後の食事を提供したチュンダ（純陀）の話には、父の最期の日に一緒に食事をしたことも思い出された。

諸々のことが重なり、前の涅槃図が涙ににじんで見えた。

生き方を重ねる

そのときに、絵解きを聞くとは、美術館で学芸員からその絵の客観的な解説を聞くようなものではなく、その話に自らの生き方を重ねて聞くこと、と思いついた。

聴き手のその時の状況により絵解きは様々に受け取れる。その人の読んできた人生と重ね合わせればいくらかでも深く聞くことが可能となる（いやそれは美術館での絵の鑑賞でも同じかもしれない）。

絵解きを終えて、この涅槃図は明治41年に当時のご住職の大黒さんの発案で、近郷の檀家の人々の寄進により調製されたものであることも説明があった。一番下にある寄進者の名前を見ると、今もこの地に続いているお家の苗字が沢山並んでいる。

涅槃図は京都の東福寺系の絵師の手になるもので、印象的な青い岩絵の具の由来や、干支にない猫が描かれ、鼠がいないことなどのお話もあった。8本の沙羅双樹の4本の木の色が違うことなど、初めて知った。

絵解きの原稿は千枝さんが整え、真永さんがさらに手を入れられたとのこと。準備は大変であったと思うが、この絵解きは聞き手の心を動かすものであった。最初は「なんだ絵解きかあ」くらいに思っていたが、それは浅墓な考えであった。伺って良かった。